

私に触れない貴方は、もう要らない

クラウディア・セルジュ

アシュリーの義母。
息子ライナスを溺愛。
なかなか世継ぎを身籠らない
アシュリーに辛く当たる。

テオドル

カイゼルの亡き親友・
ロドルフの忘れ形見。
愛称はテオ。

ライナス・セルジュ

アシュリーの夫。仕事や地位の
プレッシャーから女遊びに耽り、
アシュリーとの関を拒否する。
愛されている自分に
胡坐をかき替えている。

セイラ・バーンズ

アシュリーの学園時代からの親友。
高潔な女公卿。
傷ついたアシュリーを支え、
彼女の幸せのために奔走する。

CHARACTERS

登場人物紹介

カイゼル・オーウェン

辺境伯家の次男で、セイラの従兄。
次期辺境騎士団長。
明るく人懐っこい性格で周囲に
慕われるが、親友を亡くしたトラウマに
囚われている。アシュリーに密かに
恋心を抱く。

アシュリー・セルジュ

ライナスの妻。誠実で心優しい女性。
初恋のライナスと愛し合って結婚し、
ずっと彼に尽くしてきたが、最悪の
形で裏切られる。彼に触れてもらえない
自分に自信をなくし、男性不信に。
看護師の資格を持つ。

プロローグ

「もう妻には欲情しないんだよ。隣で寝てもなんの反応もしない」

夫が勤める王宮騎士団の執務室の前で、私は夫の本音を聞いた。

ノックをしようとした手が止まり、震える――

「お前ひつでえな。結婚してもう五年だろ？ もう二人くらい子供がいてもおかしくないぞ。聞けば子供の頃からの相思相愛で結婚したらいいじゃないか。そんな運命的な恋愛結婚の成れの果てがそれか？」

「ああ、確かに妻とは子供の頃から一緒にいたが、だからかもしれないな。新婚の時はよかったんだが……、なんていうか、毎日いつでも抱ける体があるんだと思ったら、今日抱かなくてもいいかと思うようになって、それを繰り返しているうちに食指が動かなくなった。お前も結婚してだいぶ経つんだから、わかるだろ？」

「わかんねえよ。俺はいつでも奥さん抱いてるし。しかもあんな美人を捕まえておいて食指が動かないだと？ 独身の奴らにぶん殴られるぞお前。子供作る気ないならさっさと離婚して解放してや

れよ」

「離婚ねえ……。無理だと思うなあ。アシュリーは子供の頃から俺にベタ惚れだからな。絶対離婚には応じないさ」

「だって奥さんは子供を欲しがってるんだろ？　うちの奥さんが女には子を産めるタイムリミットがあるって言ってたぞ。少しは奥さんの気持ちも考えろよ」

「子供は……。確かに親からの催促がしつこくて面倒くさいことにはなってるが、最近はどう養子を取ってもいいかなと俺は思ってるんだ。それでアシュリーとはこのまま穏やかに暮らせたらずれでいいよ」

「……お前本当に最低だな。あと俺は知ってたんだからな。お前が後腐れない女を相手に浮気してんの。女の敵だな。爆発しろ」

「なんでだよ。アシュリーは俺を愛してるんだぞ？　俺の妻でいるだけで彼女は幸せだろ」

「うるさい。手を動かせ。仕事しろ」

——こんな屈辱、初めてだわ。それを私に与えたのが、まさか夫とはね。
手の震えが止まらない。

ノックしようとした手を下ろして、私は来た道を引き返した。

「あれ？　奥様。副団長、執務室にいませんでした？」

受付の男性が私に声をかける。

——ダメよ。まだ泣いてはダメ。笑うのよ。

淑女の仮面をかぶり、私は無理に笑顔を作った。

「ちよつと忘れ物を思い出してしまつて。取りに帰るから、先にこのお弁当を主人のところまで届けてくれるかしら？」

「わかりました。お届けしておきます」

「ありがとう。助かるわ」

そして私はできるだけ優雅に、騎士団の屯所を出ていく。

馬車に乗り込み、走り出した瞬間、堪えていた涙が次々と流れ出てきた。

今日は夜勤だというから料理人に頼んで差し入れを作ってもらったけど、来るんじゃないかった。

「もう、何をしててもダメなのね」

——もう疲れた。

結婚して五年。政略結婚ではなくて、子供の頃から愛し合って結ばれた私たちだけ、仲睦まじかったのは最初の一年くらいだけだった。

未だに子供はいない。周りは私が原因だと思っているけど、私に異常がないことは医師が証明している。

子供なんてできるわけじゃない。だってあの人はもう何年も私を抱いていないんだもの。いつも同じベッドで寝ていても、どんなに努力して話し合っても、

『仕事で疲れてるし、そんな気分じゃない』

貴方からいつもその言葉しか返ってこない。

さすがに私も気づいたわ。貴方の瞳には、もう私への熱がないのだと。

貴方にとって、私はもう女ではないのだと――

時々貴方から香る、ウチとは違う石鹼の香りに、私が何度涙で枕を濡らしたか知ってる？

そんなことに気づきもせず、無防備に隣で眠っている貴方がとても憎らしい。

――もういいわ。もういい。

――疲れた。もう要らない。

私に触れない貴方は、もう要らない。

第一章

今日は友人の招待で公爵家を訪れていた。

庭園にあるガゼボに案内され、そこで優雅にお茶を飲んでいる友人の前に腰を下ろす。

この国では珍しい薄紫の髪色に、アメジストのような濃い紫の瞳の持ち主が、私の前に厚めの書類の束を差し出した。

「はい。これが調査書よ」

「ありがとう。セイラ。恩に着るわ」

私は学園の頃からの友人である女公爵のセイラの人脈を頼り、あるお願いをしていた。

それは夫の素行調査。

彼が浮気していることは前から知っていたから、離婚を決意した今、揉めることも考えて証拠を手に入れることにした。

夫のライナスは私が自分にベタ惚れだと思っているから、まさか私が別れる準備をしているなんて思いつきもしないだろう。調査書を読んだら、どれだけ私を舐めているのかよくわかった。

「浮気しているのは知ってたけど、まさか毎週のように他の女と体を重ねていたとは思いませんでしたわ。そりゃ私を抱く気にはなれないでしょうね」

自分がみじめすぎて思わず自嘲した。

「この調査書を見る限り、娼館通いと一夜限りの関係ばかりで、愛人がいるわけではない。完全に性欲処理って感じね。それにしても、まさかあのライナス様が……。学園時代はアシュリーしか視界に入ってたさそうなくらい貴女に夢中だったのに」

セイラが未だ信じられないというような顔で思案する。

「子供の頃からずっと一緒だったから、もう私には反応しないんですって。長く一緒にいすぎて、彼にとって私はもう女ではなくなったのよ」

「アシュリー……」

「セイラが羨ましいわ。私たちと同じ幼馴染同士の結婚でも、ジュリアン様はずっと変わらずセイラを溺愛してるのがわかるもの。可愛い子供たちもいる。私とは全然違って……つい羨んでしまうわ。ごめんなさいね……」

自信がなくて、卑屈になって、自分がホント嫌になる。

四年間、夫に触れてもらえなかったことが、私の自信を粉々にした。親しい友人であるセイラの前では気が抜けて、堪えきれず涙が出てしまう。

「ごめ……なさ……。もう、こんな自分が嫌いだわ……。っ」

「アシュリー……」

セイラが席を立ち、私を抱きしめてくれた。

「貴女が自分を嫌いでも、私はアシュリーが大好きよ。学園時代、公爵令嬢という立場のせいで周りから浮いていた私に、貴女は周りの目も気にせず、友人として寄り添ってくれた。私を支えてく

れた。私がそれにどれだけ救われたかわかる？」

セイラの優しい声が心に染みわたる、さらに私の涙を誘う。

「貴女が素敵な女性なのは私が一番よく知ってる。私の自慢の親友ですもの。今は心が弱っているから仕方ない。泣いてもいいのよ。ただこれだけは忘れないで。私は貴女の味方だから、遠慮なく頼ってほしい」

「ふっ……。セイラ……。っ、ううう……。っ」

胸が苦しい。息がうまく吸えない。

もういい年をした女なのに、みっともなく嗚咽して泣いている。

ライナスの言う通りよ。私は貴方を愛してた。

子供の頃からずっと、あの日貴方の本音を聞くまでは変わらず愛してた。

だから離婚を決断できなかった。それを貴方は見透かしていたのね。

そのうえで私を裏切っていたのね。

残酷な事実が心に凍りついていく。

「もう、あの人は要らないわ」

「そう……。わかったわ。離婚後の生活なら私に任せて。貴女が決意を固めるならすぐにでも私は動く。いつでも声をかけてちょうだい」

「ええ。ありがとうセイラ。心強いわ」

酷い泣き顔で笑顔を作ると、セイラも泣きそうな顔で笑って、私の涙をハンカチで拭ってくれた。本音をさらけ出せる友人がいて、よかった。少しだけ心が軽くなった。

彼の本音を聞いたあの日から、私はライナスに本当の笑顔を見せられない。ずっと社交用の仮面をかぶり続けている。

あの日の翌日、帰ってきた彼の言葉に、私はまた心が凍えた。

「差し入れありがとう。団長と一緒に食べたよ。美人で気の利く奥さんだって羨ましがられた」

ベージュピンクの前髪をかき上げ、くつきりとしたアーモンド型の赤茶の瞳が嬉しそうに細められる。端から見たら妻を蕩けるような笑顔で見つめる夫に見えるだろう。

「……そう、よかったわ」

ねえ、ライナス。——それだけ？

あの日、なんで私が執務室に顔を出さなかったか、疑問に思わないの？

私のこの他人行儀な笑顔に、何も感じないの？

当たり前のように今日も私の隣で寝息を立てている夫の寝顔を見つめる。

以前の貴方なら、私の笑顔の変化に気づいていたわ。

貴方はもう、本当に私を見ていないのね。

『アシユリーは俺の運命の女性なんだ。子供の頃からずっと愛してるよ。そしてこれからも、死ぬ

まで俺はアシユリーを愛し続ける。だから一生、俺の側にいて』

不意に、プロポーズされた時にくれた言葉を思い出した。目尻から一筋の涙がこぼれる。

——嘘つき。

「じゃあ今日も仕事頑張ってくるね。アシユリー」

夫は私の腰を抱き寄せて、額にキスを送る。

いつものルーティンワーク。夫としての作業で、そこに愛情はもうない。

「ええ、いつてらっしゃい」

涙を気づかれぬように拭った私は、笑顔で夫を見送る。

いつも口にする「帰りを待ってるわ」のセリフは、今日は言わない。貴方を待つつもりなどないから。

夫は笑顔で私に手を振って邸^{やしき}を出ていく。

やっぱりいつものセリフを言わなかったことにさえ気づかなかった。でも、もういいの。今更気づかなくても。

いいのよ、ライナス。永遠に、いつてらっしゃい——

もう私のところへ戻ってこなくていいわ。

抱く気の起きない私のことなんか忘れて、新しい人を迎えてその人との間に子供を作ってね。そ



れが侯爵家のためだわ。

部屋の上机の上に、サインした離婚届と結婚指輪、浮気の証拠の控えを置く。手紙は書かなかった。結婚する時に実家から持ってきた物だけバッグにつめて、使用人に見つからないようにこっそりと邸を出た。使用人たちはあまり私に近寄ってこないから、抜け出すことはたやすかった。ライナスからもらった物は全部この邸に置いていく。貴方に繋がるものは何も要らない。

五歳で出会って、十八歳で結婚して、今二十三歳。
十八年間も続いた恋は、美談でもなんでもなく、よくある浮気であっけなく終わった。

「何が、いけなかったんだろう」

乗り合い馬車を待ちながら、ボソッと一人呟く。
心移りなんてしたことなかった。

ライナスだけを愛し続けて、彼が王宮騎士を目指していた時も、その夢を叶えた今も、ずっとライナスを支えようと努力してきたつもりなのだけど――

「……独りよがりだったのかしら」

私のその小さな呟きは、誰にも聞かれることなく、風に乗って消えた――



邸^{やしき}に帰ると、髪を乱した家令が慌ただしく駆けてきた。

「何かあったのか？ アシュリーはどうした？」

家令が俺の質問に真っ青になる。そして信じられないことを口にした。

「旦那様、奥様はもう、この邸^{やしき}にはおりません」

「……は？ どこかに外出したのか？ もう夜だぞ。誰かアシュリーの行き先を聞いていないのか？」

「わかりません。侍女が昼食に呼びに行ったところ、既に奥様はおりませんでした。使用人全員に聞いても誰も奥様を見ておらず、先ほどまで皆で探していましたが、馬車や馬を使った形跡もありませんでした。そして机の上にこれが……申し訳ありません。緊急時でしたので先ほど、私が中を拝見しました」

俺は家令から二種類の封筒を受け取る。一つは手紙サイズの封筒。もう一つは書類が入るサイズの大きな封筒だった。

「奥様は……お一人で邸^{やしき}を出て行ったようです」

「——は？」

アシュリーが、出て行った？

コイツは何を言っているんだ？

「意味がわからない。俺は疲れてるんだ。お前の冗談に付き合っている暇はない。引き続きアシュリーを探し——」

「冗談ではありません。中を見てください。坊ちゃん」

家令が俺を昔のように呼び、言葉を遮った。そしてこちらに厳しい視線を送っている。

いつもとは違う雰囲気の家令の圧に押され、俺は手元の封筒に視線を落とす。

手紙サイズの封筒から急いで開けると、中から何か落ちてきた。

「なんだ？」

床に落ちたと思われる何かを探し、その物体が視界に入り——俺は固まった。

アシュリーの結婚指輪だ。

ドクン、ドクン。急速に心拍数が上がり、顔から血の気が引いていくのを感じる。慌てて封筒の中身を取り出して広げると、それはアシュリーのサインが入った離婚届だった。

「離婚届!? なんで！」

冷や汗が止まらない。

俺は震える手でもう一つの大きいサイズの封筒を開けた。そこに入っていた物に目を通し、再び固まった。その書類には、俺の不貞の証拠の数々が記してあった。

ここ最近、二ヶ月ほどの俺の素行調査書。

娼館に行った日時や、一夜限りの令嬢や未亡人たちとの情事の日時や場所、彼女たちの身元まで

すべて記されていた。

「な……、なん……なんで……」

焦りすぎて何も言葉が出てこない。いてもたってもいられず、俺は書類を片手にアシュリーの部屋に向かって駆け出す。

勢いよく扉を開けるとそこにはいつもの部屋の風景が広がっていて、アシュリーが出ていったなんてわからないほどだ。荷物を整理した痕跡はなかった。

だから俺は、望みを持ってしまったんだ。

これは、俺の浮気を知ったアシュリーが、嫉妬をして衝動的に家を出ただけなのだと――

きっと俺の気を引きたくて、追いかけてほしくてこんな騒ぎを起こしたのだ。

荷物はすべて部屋に残っている。それが答えだろう。これは帰る前提の家出なのだ。

だから、ほとぼりが冷めたらきつと戻ってくる。そうじゃなくても俺が迎えに行つて謝れば、俺を心底愛しているアシュリーなら許してくれるはずだ。

家令がすぐにアシュリーの実家や騎士団に使いを出すことを提案してきたが、俺はただの夫婦喧嘩だから大ごとにするなど却下した。

きっと今は実家に向かっているんだろう。

俺の浮気を知つて動揺してこんな行動に出してしまっただけで、アシュリーが本気で俺から離れられるわけがない。

できればすぐに実家に迎えに行つてやりたいが、俺は副団長で仕事は激務だ。休まないと迎えに

行けない。

今から一日休みを申請しても取れるのは一ヶ月後。とりあえず明日申請はするが、きっとアシュリーのことだから一ヶ月も経たずに寂しくなつて帰ってくるだろう。俺たちは子供の頃からずっと一緒にいて、長期間離れたことなんて一度もないのだから。

帰ってきたら浮気のことばを下げて謝ろう。それでしばらく浮気は封印し、アシュリーを優先して過ごせば、きつと元通りの生活に戻るはず。

――なら、むしろ今は気兼ねなく女と過ごせるんじゃないか？

そう思った俺は、アシュリーが戻ってくるまでの間、最低にもまた女との情事に耽^{ふけ}った。

でも、一ヶ月経つてもアシュリーは帰つて来なくて、さすがに不安になった俺は、申請していた休暇の日に急いでアシュリーの実家に向かった。

出迎えた義父である伯爵に彼女を迎えに来たと告げると、怪訝な顔をした。

「どういことですか？ 娘がいなくなつたんですか!?」

アシュリーは実家に帰っていないかつた。どういことだ？ 誰にも言わず、何も持たずに邸^{やしき}を出ていったのか!? 実家じゃないなら一体どこに――

「なぜ出ていった日を探しに行かない！ 何をしていんだ貴様は！ それでも夫か！」
一ヶ月前からいらないことを白状したら、伯爵に殴られた。

当然だ。妻が出て行ったのに、勝手に実家に帰ったと決めつけて探しもしなかったんだ。女一人、身一つで出て行って安全なわけがない。

急いで邸に帰って、再びアシュリーの部屋に入り、手がかりを探した。

机の中や引き出しには、手がかりになりそうな物は何も無い。クローゼットを開けると、今まで俺が贈ったドレスや小物がすべて残っている。

「どういうことだ？ 本当に何も持たないまま、消えたのか？」

アクセサリーケースを開けてみると、そこにも子供の頃から今までに俺が贈ったジュエリーや髪飾りが入っていた。

一見異常はなさそうに見えたが、全体を見渡して俺は違和感に気づく。

アシュリーが結婚前に気に入ってたつけていたジュエリーや髪飾りがない――

学園を卒業するまで、俺は一途にアシュリーのことしか見ていなかったから、当時身につけていたアクセサリーは全部覚えていた。それらが探しても一つもない。

ドレスもよく見たら、結婚する時に嫁入り道具として持ってきていたものが一切なくなっていた。

――つまり、アシュリーは俺が贈った物をすべて邸に置いて出ていったのか。

「……っ!!」

手にしていたアクセサリーケースの蓋がガタガタと音を鳴らす。

ここに来てようやく俺は真実に気づいた。

アシュリーは、――本気で俺を捨てたんだ。



「あら、ご機嫌よう。ライナス様」

「久しぶりだなライナス。お前の結婚式以来か？ どうしたんだ、そんなに慌てて」

「……突然の訪問で申し訳ありません、バーンズ女公爵様。そして久しぶりだな、ジュリアン」

この夫婦と顔を合わせるのには本当に久しぶりだった。貴族なら普通は夜会で顔を合わせるものだが、俺は王宮騎士だから夜会の時はいつも警備を担当していて、社交の場にはまったく出ていなかった。

すべてアシュリーに任せていたんだ。

今回はそれが仇となり、俺はアシュリーの交友関係をまったく知らなかったことに気づく。

共通の知り合いは、学生時代からアシュリーの親友であるバーンズ女公爵と、その夫――騎士科で同級生だったジュリアンしか知らない。

だから俺はいてもたってもいられず、こうしてバーンズ公爵家を訪ねた。

「ケイト、お客様を応接室に案内して」

「かしこまりました奥様」

「ではライナス様、準備ができましたらすぐに向かいますので、部屋でお待ちください」

「先触れも出さず本当に申し訳ない。感謝します」

俺は動揺で震えてしまう手を強く握りしめながら、頭を下げた。

顔を合わせるなり、バーンズ女公爵の威圧を感じたのだ。微笑みを浮かべてはいたが、アメジストの瞳が俺を冷たく捉えていた。

あの目はきっと、アシュリーのことを知っている。

「お待たせしました、ライナス様。今日はどういったご用件でいらしたのでしょうか？」

「実は、先月アシュリーが邸を出たまま戻らなくて……。女公爵様は何かアシュリーから聞いていないだろうか？ もし行き先を知っていたら教えてほしい」

「どういことですか？ アシュリーが出て行ったのですか？ しかも先月って……騎士団には連絡しましたの？ 何か事件に巻き込まれたんじゃない？」

「いやっ、事件ではないんだ。ちよつとした夫婦喧嘩ですれ違ってしまつて……。早く見つけて妻を迎えに行きたいんだ」

「夫婦喧嘩……そう。じゃあアシュリーは勇気を出して貴方と話し合つたのね」

「やつぱり何かアシュリーから聞いてるんですか!? 教えてください！ アシュリーは一体どこに行つたんですか!?」

「夫婦喧嘩をするほどアシュリーと向き合つて話をしたのでしょうか？ 当然あの話よね？ それ

で？ 貴方はアシュリーに何を言つたの？ あんなに貴方を愛していたアシュリーが家を出て行くなんてよっぽどだわ。……貴方、一体何を言つたのよ」

鋭い視線が突き刺さり、体が硬直する。

こちらを射抜くその瞳は軽蔑の色を帯びていて、俺は彼女がすべて知っていることを確信した。のどが渴き、背中に冷たい汗が流れるのを感じる。

そんな俺の様子を見て、バーンズ女公爵は凍えるような冷たい笑みを浮かべた。

「貴方、アシュリーが貴方のお母様や使用人たちから何て言われていたか知ってる？」

「え……？ 母たちが？」

「石女。夫に愛されない気の毒な奥様。そうやって蔑まれてたのよ？ ずっと、何年も。貴方のせいだね」

「は!？」

「おかしいわよね。アシュリーは何も悪くないのに」

目を細めてこちらを見る彼女に、夫婦の閨事情まで知られていることを察した。

「だって貴方、子供の作り方を忘れたようだよ。侯爵家当主なのに驚きだわ。それなのに妻だけ責められるなんて理不尽じゃなくて？」

「……っ」

必死に返す言葉を探すが、何も見つからない。何を言つても言い訳にしかないような気がした。

考えてみれば、彼女は公爵なのだ。アシユリーが置いていった俺の素行調査書も、彼女が手助けして作られた可能性が高い。今更ながら、そんな考えにも至らずにのこのことバーンズ公爵家を頼った俺の行動はさぞ滑稽に映っただろう。今では背中どころか顔中に冷や汗が滴っている。

どのくらいの時間が経ったのか。俺が何も言えずずっと俯いたまましていると、頭上からため息が聞こえてきた。

「もういいわ。アシユリーは私の大事な友人なの。だから公爵家で搜索をかけます。お話は以上ですわね。どうぞお帰りください」

「ちょ……ちよつと待ってください！ さっきの……母や使用人たちの話は本当なんですか!？」

「ご主人なんですから、それくらいご自分で確かめてはいかが？ ジュリアン、お客様のお見送り頼んだわね」

「ああ。わかった」

「ちよつと待ってください——」

俺が言い切る前に、バーンズ女公爵は部屋を出て行ってしまった。

「……アシユリーはお前たち夫婦にどこまで話してるんだ？」

まさか聞^{きこ}を共にしていないことまで話しているとは……

「俺はそこまで詳しくは知らない。子供ができないことで悩んでいたのは知ってる」

「そ、そうか……」

子供ができないことをそこまで思い詰めているとは思わなかった。

普段、アシユリーは俺の前ではいつも笑っていたから——

子供については何度か話し合いはしていて、いつも「いずれは」「自然に任せる形で」という結論に至っていた。

父と母にも俺からそう伝えて、『一人で決めたことに一切口出しするな』と釘を刺してからはあまりうるさく言ってこなくなったから、納得してくれていると思っていた。

まさか俺の知らないところでアシユリーに何か言っていたのか？

「お節介かもしれないが、俺から一つ忠告をしておく」

少し目にかかる焦げ茶の前髪の間隙から、ジュリアンの若葉色の瞳がじっと俺を見据えた。

「な……なんだ？」

「妻が自分の隣にいるのは、当たり前のことじゃない。お前は多分、これからそれを嫌というほど思い知らされるだろうな」

「どういう意味だ」

「そのままの意味だよ。隣にいたはずの愛する人がある日突然消えて、手の届かない人になることもある。愛情は無限にあるものじゃないんだよ。花だって水をやらなければ枯れてしまうだろう？ お前は彼女の愛情に見合ったものを返していたのか？——よくよく自分の行動を振り返るんだな」

なんだよ……。一体なんだってんだよ。

コイツの見透かした言い方にイラつく。

俺たちの何を知ってるっていうんだ！

「ア……アシュリーは戻ってくるさつ、だってつい最近まであんなに俺のこと愛してるって言ってたんだぞ！ そんな急に気持ちが変わるのか？ 十八年間も一緒にいたんだぞ？」

「だから？」

「は？」

「……あのな。血を分けた親や兄弟でさえ無条件でずつと一緒にいることはできないのに、なんで赤の他人の妻が側にいて当たり前だと思えるんだ？ お前のその自信はどこから湧いて来ただよ」

だって——アシュリーは子供の頃から俺だけを見てくれていたんだぞ。

ずつと、俺だけを愛してくれていた。それが俺の日常だったんだ。

「お前の言うその十八年は当たり前のものじゃなくて、彼女の支えで成り立っていた時間だ。お前は結婚してからそのことに一度でも感謝したことがあるのか？ アシュリー嬢が望まなくなったらそんなもの簡単に壊れるんだよ。現にお前は今一人じゃないか」

軽蔑した目が俺を射抜く。

ああ——

やっぱりコイツも全部知ってるんだな。

俺がアシュリーに隠れて不貞を働いていたことを。恐らく女公爵も……

「さあ。もう帰れ。アシュリー嬢のことはこちらでも探す。ひと月前に知らせてくれればすぐに見つかったかもしれないのに、今からじゃ骨が折れるぞ。騎士団への搜索依頼も検討したほうがいいのかもしれないな」

俺はもう何も言えなくなつて、促されるままに公爵家を出た。



「そうですか。女公爵様がそんなことを。……ええ。事実ですよ」

「なんだと？」

邸^{やき}に戻ってから俺は家令に真実を確かめた。

アシュリーが本当に使用人たちから軽んじられていたのかを——

結果は肯定の返事。俺たちが何年も聞^{きこ}を共にしていないことは、ほとんどの者が知っていたらしい。部屋を整える使用人ならすぐにわかることだと。

表立って口にする者はいないが、彼らの間で憐れまれて噂されていたのは事実だった。使用人たちはアシュリーを軽んじ、遠巻きにしてあまり近づかなくなっていたという。家令が耳にして嚴重注意をして回っていたが、あまり効果はなかったらしい。

そして母は二ヶ月に一度の頻度で領地から出てきて、妊娠はまだなのかと催促していたらしい。

アシュリー宛に手紙もよく来ていたのだとか。

「なんで知らせなかった」

「奥様に止められていましたので」

「なぜ？」

「旦那様に子供に関する話題を出すと辛そうなお顔をされるから——だそうです」

家令の冷めた視線にいたたまれなくなる。

「今更ですよ。だから私は奥様が出て行かれた日に、ご実家と騎士団に知らせるべきだと申し上げたのです！ それを坊ちゃんは……」

「わかってている！ 明日騎士団に捜索を依頼する」

家令の言葉を遮って、俺は執務室を出た。

「何をやってんだ俺は……」

今となつては、なんで一ヶ月も放置できたのかわからない。

「無事でいてくれ、アシュリー……っ」

『今更ですよ』という家令の言葉が突き刺さる。本当にそうだ。

夫婦の寝室に入り、部屋を見渡す。アシュリーがいないだけで、とても広く殺風景に感じた。よく今まで一人で何も感じずに眠れたものだ。

アシュリーは俺の前ではいつも笑顔だったから、俺といるだけで幸せなんだと思っていた。でも、違つたんだな。ただ俺が、何も知らないだけだった。

「——いや、違うな。知つてた。俺がアシュリーをずっと傷つけていたことを。……知つてて目を逸らして、ごまかしてただけだ……」

後ろの扉に寄りかかると、膝の力が抜けてしまい、そのままズルズルとその場にへたり込む。

何もかも、うまく回つてると思つてた。

バレなければいい。バレても俺を愛してるアシュリーなら許してくれるとさえ思っていた。

『お前のその自信はどこから湧いて来てんだよ』

不意に、ジュリアンの言葉が頭の中に浮かぶ。

「ホントにな……。何が『愛されてる』だよ。我が身可愛さに、アシュリーを犠牲にして……」
たまらなくなつて髪の毛を掻きむしる。

俺は自分が辛くなるのが嫌で、ずっと現実から逃げていただけだ。

俺がこんな根拠のない自信を持てるのは、十八年間アシュリーが俺を愛して、支えてくれていたからなのに。

俺はその気持ちに胡座あぐらをかいて踏みじった——

「すまない……っ、アシュリー……っ！」

結婚したら、どうもこいつも遠慮なく子供や聞きこのことを聞いてくる。以前はそれが嫌でたまらなかつた。放つておいてほしかつた。

きつとアシュリーは、それを察して何も言わなくなったんだな。

俺だつて抱けるならとつくに抱いてるさ。でも、もうアシュリーはそういう対象ではなくなつてしまつたんだ。こればかりはどうしようもない。

こんなことになるなんて、昔は思つてもみなかった。

アシュリーと初めて関係を持ったのは学園時代だった。子供の頃から愛していたアシュリーと結ばれて、幸せで満たされたのを覚えている。

この国では、婚姻まで純潔を求められるのは、王家や由緒ある高位貴族、契約に基づく政略結婚の場合のみだ。婚約者同士の婚前交渉については割と認められていて、俺たちみたいな恋愛結婚も多い。

ただ、結婚式前に子供ができるのはよしとされないので、婚姻前までは避妊するのが一般的だ。あの頃はアシュリーと繋がるたびに愛しさが増して、一生彼女を愛して守つていこうと思つた。卒業後の結婚が待ち遠しかった。

その後、結婚して二人の時間が増えて、最初はすごく幸せだった。

せっかく毎日一緒にいられるのだからと、俺はまだ二人の時間を楽しみたくて、こっそり避妊薬を飲んでいた。

アシュリーも特に何も言っていなかったし、彼女も俺と二人きりの時間を望んでいると思つていた。今となつては俺の一方的な思い込み以外の何ものでもない。

そうして一年が経つてそろそろ子供を……と考え出した時に、俺は部隊長に就任し、一気に仕事に忙しくなつた。そして出世に比例してだんだん閨^{おんな}の回数が減つていった。

たくさんの部下を抱えて仕事のプレッシャーも増え、更に侯爵家当主の仕事もある。

その頃はもう避妊薬は飲んでいなかったが、女性には妊娠しやすい時期があつて、それに合わせて行為をしなければ妊娠しづららしい。

でも毎日がとにかく忙しくて、そんな状況で適切な日にタイミングを合わせるのはとても難しかった。安全日に抱いたら責められているような気さえた。

アシュリーは何も言わないから完全に俺の被害妄想だけど、抱きたい時に抱けない義務のような子作りは、俺にとってストレスになつていった。

でもアシュリーは何も悪くない。俺が侯爵家の一人息子であるにも関わらず、騎士の夢を捨てきれなくて、勝手に多くのものを抱え込んだだけ。

そして勝手にプレッシャーに圧されて余裕がなくなつた。ただそれだけだ——
そして副団長にまで出世した今、気づいたら何年もアシュリーを抱いていなかった。
いや、抱けなかった。

何度か、アシュリーが妊娠しやすいという日に自ら誘つてきたことがある。
でも俺はその気になれなかった。

愛する人が誘つてくれて嬉しいはずなのに、俺は断つてしまつた。
その時のアシュリーの傷ついた顔が忘れられない。

自分が傷つけたくせに、胸が痛かった。

そのうちアシュリーを傷つけるのが怖くて、そういう雰囲気になるのを極力避けた。

——子供が欲しくないわけじゃない。

アシュリーとの子なら、可愛いに決まってる。

でも、義務だと思うとその気になれない。

こればかりは生理現象だから仕方ないじゃないか？

不能になったのかと心配になったこともあった。

それで追いつめられて、俺は確かめに行ってしまったんだ……

同僚に娼館に誘われた時、いつもは断るのに、その日は断らずに行ってしまった。

今思えばそれは間違いだった。確かめた結果、アシュリーにだけ反応しないのがわかってしまったから——

結果を知って余計苦しくなっただけだった。

アシュリーのことは変わらず愛してる。

彼女との暮らしにはなんの不満もないし、他に好きな女ができたわけでもない。

ただ——抱けない。

なぜなのかさえ、もうわからない。向き合うのが怖い。

正直、離婚を考えたこともある。

アシュリーのことを思えば、そのほうがいいのかもしれないと。

でも決断できず、状況を変えることもできず、現実逃避して仕事に逃げたまま、ズルズルとここまで来てしまった。

ベッドに腰かけると、まだ微かにアシュリーの香りが残っている気がした。

俺が部屋に入れば、嬉しそうに淡い金の髪を揺らしてこちらに駆け寄り、いつも労いの言葉をかけてくれた。

俺を慈しむように、愛しそうに見つめてくるエメラルドグリーンの瞳が何よりも好きだったのに、なぜ大事にしなかったのだろう。

——その愛は、当たり前前にそこにあるものじゃなかったのに。

「アシユリー、包帯と消毒薬が足りなくなりそうだから補充しといて。それから解毒薬も。もうすぐ辺境騎士団が帰ってくるから」

「わかりました。タオルやガーゼはこれで足ります？ まだ追加しますか？」

「ああ、そうだな。備品室にあるもの全部持ってきてくれ。それからついでに毛布も頼む」

「わかりました！」

私は今、セイラの伝手を頼って辺境騎士団の見習い看護師として働いている。

辺境伯であるルードヴィヒ様の奥様——ソフィア様はセイラの叔母で、看護師の資格を持っている私を快く受け入れ、住む場所と仕事を提供してくれた。

離婚協議中の侯爵夫人なんて厄介者でしかないのに、辺境伯夫妻には感謝しかない。

騎士のライナスを支えたくて取得した看護師の資格が、こんなところで役に立つとは皮肉な話だ。「お飾り妻」だと揶揄されるのが嫌で頑張って取得したけど、肝心の夫にはなんの役にも立てず、努力は空回りして終わった。

王宮で働くライナスは警護が主な任務で、よほどのことがない限り戦闘には出ない。ケガをしてもかすり傷程度で、私の出る幕はなかった。

——でも、

『貴女が得た看護の知識は、辺境の地で重宝される。そして貴女の身は最強の辺境騎士団が守ってくれるわ。どう？ 看護師として、行ってみる気はない？』

セイラからそう言われて、胸が熱くなった。

私を必要としてくれる場所。そんな場所があるのなら、ぜひ行きたい。

私の存在を認めてくれる場所のなら、憂いなく新しい人生のスタートを切ることができる気がするから。

両親には、邸を出る前に手紙を出した。

ライナスとは離婚すること。しばらく彼には会いたくないから、私の居場所は秘密にしてほしいこと。そして実家には戻らず、辺境で看護師として生きること。

もし、ライナスが訪ねてきたら私の居場所は知らないと言ってほしいこと。そして私への連絡は、完全にライナスと縁が切れるまではセイラを通してほしいとお願いした。

両親からの返事には、離婚を咎める内容は一切なく、ただただ娘のことを心配していると綴られていた。

手紙から両親の愛情を感じ、申し訳なくて涙が出た。

これ以上心配をかけないためにも、ちゃんとしっかり自分の足で立たなくちゃ。

今までの私はライナスを支えるために生きてきたけれど、これからは自分のために生きるわ。この地で看護師として、新しい人生を始めるの——

騎士団の帰還を知らせる鐘が鳴り、皆が慌ただしく彼らの受け入れ準備に取り掛かる。

処置室の前で初めて彼らを出迎えた時、私は目を見張った。

視界に飛び込んできた光景は、まさに地獄絵図のようだった。

ダルの森に出現した魔物を討伐しに向かった辺境騎士団は、ほとんどの者が大量の血に染まり、処置室は一瞬で戦場と化した。

生死を彷徨^{さまよ}うほどの重傷患者を初めて見た私は、むせ返る血の匂いに吐きそうになり、足がガクガクと震えた。それは想像を絶する光景だった。

「アシユリーさん！ 運ばれたケガ人たちにこのハンカチを巻きつけて重症度別に分けてください！ 重傷患者は先に治療するから奥に運んで！」

「わ、わかりました!!」

震える足を叩いて無理矢理動かし、他の看護師たちと共に負傷者たちの状態を見て、症状別に色のついたハンカチを彼らの腕に結んでいく。

赤が重傷、黄色がケガは酷いが意識のある人、緑が軽傷、そして黒は、死亡または助けるのが無理な人……

幸い今回は黒いハンカチをつけなくて済んだ。よかったと胸を撫で下ろす。

「アシユリーさん！ 手が空いていたらこっち手伝って！」

「はい！」

名前を呼ばれ、急いで重傷患者の治療サポートに入った。

医師の先生や先輩看護師たちの指示に従い、必要な器具や薬を手渡して次々と治療を終わらせていく。

そして騎士団が帰還して三時間後、ようやく全員の治療が一段落した。

死者が一人もいなくて本当によかった。最初はとても怖かったけど、治療に必死すぎて、動いているうちに恐怖も吹き飛んでしまっていたわ。

病室で片づけをしていたら、奥から先生がやってきた。

「アシユリー、本当にありがとう。お前さんのお陰でスピーディに治療を終えることができたよ。手遅れになる者がいなくてよかった。落ち着いたからしばらく休憩するといい」

「本当に、優秀な人が来てくれてとても助かるわ。この調子でよろしくね」

「お褒めに預かり光栄です。まだまだ至らないところを発見したので、次はもっと手際よくできるよう頑張りますね」

胸の横で拳をギュッと握ると、先生は「頼もしいな」と笑顔で私の働きぶりを褒めてくれた。嬉しい。難しくて苦労したけど、勉強してよかったと心から思えた。

「——う……うう……っ」

一息ついていると、目の前の重傷患者が甦^{うな}されだした。額に汗をたくさんかいて、苦しそうに顔を顰^しめている。

「せっ、先生！ 患者さんの様子が……っ」

慌てて先生を呼ぶと、すぐこちらに来て診察をしてくれた。

「大丈夫。ただ魔^まされてるだけだ。この騎士にはよくあるんだよ。討伐^{討伐}のトラウマを抱えてる奴が多いからな。しばらくしたら落ち着くと思うから、念のため見てやってくれるか？」

「はい。わかりました」

討伐のトラウマ……

先ほどの惨状を思い浮かべれば、トラウマの一つや二つあってもおかしくない。

王都の騎士団との違いに戸惑いを覚える。

ライナスのいた王宮騎士団では、こんなに鬼気迫るような空気を感じたことは一度もなかった。でも、よく考えれば当たり前のことだ。王都と辺境では相手にしている敵が違う。

彼らは人間だけではなく、魔物も相手にしているのだ。王都に魔物が入ってこないのは、こうして彼らが命をかけて国を守ってくれていたからなのだろう。

その姿を見て、看護師としてより一層、彼らの命を救いたいという使命感が生まれる。

彼らの一人一人が大事な戦士であり、国防の要なのだ。

そんな決意を新たにしていると、小さなうめき声が聞こえた。

「う……して……くれ」

「え？」

起きたのかしら？ と思い、彼の口元に耳を近づけ、言葉を拾う。

「許し……て……くれ」

再び彼の顔を見ると、目尻から涙をこぼしていた。

「——辛い夢を見ているのね」

彼は全身傷だらけで、一番酷かったのは細い棒のような物で突き刺された胸部の傷だった。

運良く心臓を外れて致命傷を免れていたが、かなり出血していたのでまだ予断を許さない。

彼の顔色は未だに悪かった。

それなのに、更に怖い夢まで見て魔^まされるなんて……。これでは精神を削られて治るものも治らなくなってしまうわ。

「大丈夫よ。ここには貴方を責める人など誰もいない」

新しいタオルで彼の汗と涙を拭い、ベッドの横にある手を取って軽く握った。

すごく大きな手なのに、冷たくなって震えている。

そして未だに許しを乞う彼に、「大丈夫。もう怖くない」と何度も応えながら、私はその冷えた手が温まるように摩^{さす}り続けた。すると次第に彼の声が途切れ途切れになり、やがて寝息が聞こえだした。

「よかった。落ち着いたみたいね」

そして彼が意識を取り戻したのは、窓枠にオレンジ色の光が差しかかる頃だった。ぼんやりとしていた視線が私を捉える。

「——あれ、俺……死んだ？ ……女神がいる」



「アシユリー！ もう仕事終わったのか？」

医務室を出ると、黒髪短髪の大柄な男性が声をかけてきた。

「カイゼル様……」

セイラと同じアメジストの瞳が細められ、私に微笑みかける。

「はい、もう帰ります。今日もお疲れ様でした」

余計なことを言われる前に頭を下げて踵を返すと、なぜか彼もついてきた。

彼はあの時ひどく魘^{うな}されていた重傷患者で、なんとセイラの従兄——边境伯様の二番目のご子息だった。

「アシユリー、今日こそ一緒に飯食いに行こうよ。看病してくれたお礼もしたいし」

「仕事をしたままでなのでお礼なんていりません。それに、カイゼル様は全治三ヶ月のケガで絶対安静の身なんですよ？ なぜベッドで寝ていないんです？ また先生に怒られますよ」

「大丈夫大丈夫。俺、昔から体だけは丈夫だから。これくらいのケガどうってことないって」

「何言ってるんですか。貴方死にかけたんですよ!? 全然大丈夫じゃないでしょう!」

しかも魘^{うな}されて泣いてたくせに！

「いいから、早く病室に戻ってください」

私は彼の病室を指差して厳しい視線を送る。

実は彼が病室を抜け出すのはこれが初めてではない。

じっとしているのが苦手なのか、特に用もないのにこうして私に話しかけてくるのだ。

「アシユリー」

「は・や・く、戻りなさい」

睨みを利かせる私に、カイゼル様はシュンとして、肩を落とす。

——幻覚かしら。なぜかへにゃつと下がった犬の耳と尻尾が見える気がするんですけど……

「……わかった」

彼は肩を落としたままそう呟くと、トボトボと病室へと戻っていった。

大柄な彼の丸まった背中を眺め、なぜか罪悪感が湧いてくる。

私と彼は患者と看護師で、それ以上でもそれ以下でもない。

看護の時も塩対応だったのに、なんで懐かれているのかしら……

『俺、アシユリーという話したいんだ』

彼が目覚めてから何度かそう言われたけど、なぜ？ なんのために？

彼も辺境伯家の人間なのだから、私がどんな経緯でここで働くことになったのか知ってるんじゃないの？ こんな離婚協議中の厄介な女に構っても、面倒なだけだろうに——

——先日、セイラから手紙が届いた。

ライナスはまだ離婚届を出していないらしい。

それどころか、今頃必死に私の行方を探しているのだとか。
今更なんなのかと腹が立つてくる。

私が出て行つてからの一ヶ月、いつも通り女遊びしていたことはセイラから聞いて知っている。
別に探してほしかったわけじゃないけど、こうも侮られると、離婚の話し合いだとしても会うのが嫌になつてくる。

——できることなら、このまま会わずに離婚したい。

これ以上私を侮るライナスを知りたくない。

これ以上私を失望させないでほしい。

せっかく新しい人生を歩もうとしているのに、再びドロドロとした黒いものが私の中で渦巻き、
枷のように私を縛り、絶望の縁に落とそうとする。

そのまま思考が飲まれそうになつたその時、

「アシュリー……？」

名を呼ばれ、俯いていた顔を上げると、病室に戻つたはずのカイゼル様が立っていた。

私が浮かない顔をしていたからか、心配そうにこちらを見ている。

「アシュリー、どうしたんだ？　なんでそんな泣きそうな顔——」

「カイゼル!!」

彼が私に一步近づこうとしたその時、後ろから彼を呼ぶ声が二重に大きく響いた。

「げっ、兄上と先生……っ」

「——ほら、さつさと戻らないから見つかっちゃいましたよ」

彼の後ろからすごい剣幕で近づいてくる男性二人。

一人はカイゼル様のお兄様で、辺境伯家嫡男のセシル様。

筋肉質な体躯をしているのは兄弟一緒だけど、セシル様は細身で、どちらかというと王宮騎士の
ような洗練された雰囲気の持ち主だ。

弟のカイゼル様は長身で、逞しい体躯をしていて整つた顔立ちだから一見威圧感があるけど、人
懐つこい性格のおかげか、私には懐いてくる大型犬に見えてしまう……

「お前はまた病室抜け出しやがつて！　出血多量で瀕死だったくせに何やってんだバカ！」

「いつて！　やめろよ兄上！　ケガ人に全力の拳骨を食らわせるとはなんて鬼畜な！」

「絶対安静だつて俺は言つたよな、カイゼル？　何度言つたらわかる？　医者 of 俺の言うことが聞
けないのか？」

「せ、先生、いや、そういうわけじゃ……」

「ほら、カイゼル様。早く戻ってください。動き回るとせっかく縫合した傷口が開いて、治るもの
も治りません」

「アシュリー——」

「いい年して駄々をこねるな！　仕方ないな。こんなに医者 of 言うことを聞かない患者には尻に麻
酔注射をお見舞いして強制的に安静にしてやろう。セシル、手伝え」

「わかった」

「え？ 注射!? いや、それは無理！ 嫌だ！ 戻る！ 戻るから注射だけは勘弁してくれ！」

——この人は何を言っているのだろう。

あんな生死を彷徨^{さまよ}うケガを負ったというのに、注射のほうが怖いのかしら？

こんな大きな体をした男の人が？

目の前で兄と先生に両腕をガツチリと抱えられて引きずられていく彼の頭には、また下を向いてぶるぶる震えている犬の耳が見える気がした。

どう見てもヤンチャな弟が兄と先生に雷を落とされて、お仕置きに連行される図。

「ふっ」

なんだかそれが可笑しくて、和やかで、私はつい吹き出してしまった。

さっきまでのドロドロとした重たい気持ちが嘘のように晴れて、私はただ純粹に、目の前の彼らのやり取りが面白くて、目尻に涙を浮かべて笑ってしまった。

「……可愛い……やっぱ女神……」

相手に失礼だと思い直し、笑いを堪えようと必死になっている私は、彼が頬を染めてそう呟いたことにも、その呟きを聞いて二人が驚いた顔で彼を見ていることにも、まったく気づいていなかった。



「……おいライナス。その日増しに濃くなっていく特殊メイクみたいな酷いクマ、なんとかしろよ。体調管理も騎士の務めだぞ。ちゃんと寝ろ」

団長が呆れた顔でため息混じりに注意してきた。

「……眠れるわけないだろう。妻が見つからないんだぞ」

「自業自得だろ？」

「……っ」

騎士団にアシュリーの搜索を依頼したことで経緯を聞かれ、俺は職場で信用を失ってしまった。団長は、俺がアシュリーがいなくなっていた時期にも女遊びに耽^ふつていたことを知っていたので、クズだと罵られ、思い切り殴られた。

「それから、来月査問会議が開かれることになった。夫人が失踪したにも関わらず届けを出さなかったこと、事件性も考えられる中、一ヶ月も搜索を行わなかったこと。お前の行動は、副団長にあるまじき行動だと問題視されている。それは奥さんが見つかったも見つからなくても関係ない。倫理観の問題だ。処分は免れないと思え」

「……わかってる」

「事件性を考えた場合、お前が真っ先に疑われる可能性もあったんだぞ。浮気を責められて妻に危害を加え、隠匿した。とかな」

「なっ、そんなことするわけないだろ！」

「そんな疑いをかけられても仕方ないくらい、お前は自分の妻を粗末に扱ってたんだよ。お前がど

う言い訳しようが周りにはそう見えてんだ。それくらいお前の取った行動は騎士としてあり得ない。奥さんを見下してるからそんな馬鹿な真似ができるんだよ。もう奥さんの希望通り、さっさと離婚してやれ」

「嫌だ！ 勝手に決めつけるなよ。俺は見下してなんかいい……っ、アシュリーを愛してるんだぞ！」

「はっ、笑わせんなよ。お前の行動のどこに愛があるんだ？ 妻に欲情しないって見下してたのはどこのどいつだよ。飽きた人形を急に取り上げられそうになったから焦って執着してるだけだろ」

「……違う……違う!!」

「……とにかく、査問会議までこれ以上問題起こすなよ」

離婚なんて嫌だ。アシュリーが俺から離れるなんて、絶対に嫌だ。

今日も、邸にアシュリーが戻った痕跡はない。

主のいない彼女の部屋からは、わずかに残っていた残り香さえ消えてしまった。

まるで最初からアシュリーという存在がいなかったかのように――

「……アシュリーっ」

前髪を掻きむしり、両手で顔を押さえる。指の隙間から涙がこぼれ落ちた――

責任や嫌なことから逃げて、ずっと愛していた人を傷つけてまで、俺は何がしたかったのだろう。あんなに持て余していた性欲は、アシュリーが俺の前から本当に姿を消してしまったと知った時

から、驚くほどきれいに消え去った。相手から誘われてもまったくその気にならない。

今思えば、娼館に行つて初めてアシュリー以外の女を知って、箍が外れてしまったのだろう。

妻がいるのに他の女を抱く背徳感に酔いしれていただけなのかもしれない。

関係を持つても、心から愛した女なんて一人もいなかった。

ただの性欲処理で、その行為に愛なんてなかった。

そんな俺の醜さを、アシュリーはきつと嫌悪したんだろう。だから俺を捨てた。

置き手紙すら残さずに、俺がアシュリーにあげた贈り物も、結婚生活も、俺と過ごした十八年間の思い出も――全部捨てられてしまった。

「アシュリー……っ、ごめん……ごめんっ」

考えたらすぐにわかることなのに、なぜ考えようとしなかったのか。

俺がアシュリーに同じことをされたらどうなんだ？

アシュリーが俺以外の男に抱かれるなんて、考えただけで腸が煮えくり返る。

許せるわけがない――

「アシュリー……」

考えれば考えるほど、取り返しのつかない現実に絶望感が増す。

そしてアシュリーが行方不明になってから二ヶ月が過ぎた頃――

アシュリーの代理人を名乗る弁護士の男が、休日突然邸に来了。

ブロンズカラーの髪を後ろになでつけ、威厳のある雰囲気を纏った壮年の男が、俺の前に離婚届と慰謝料請求の書状を広げた。

その離婚届にはしっかりとアシユリーのサインが記されている。

「侯爵は未だに離婚届を提出されていないそうですね？ 書類に不備があったのかと思い、改めて新しい離婚届を用意しました。こちらは私が確認しまして、不備のない書類となっています。あとは侯爵のサインをこちらにいただければ提出可能です。またこちらは依頼人からの慰謝料請求の書状です」

挨拶もそこそこに突然離婚と慰謝料請求の話が出て、俺は思考がストップしてしまった。

「侯爵？ 聞いてます？」

「ちよっと待ってください……離婚はともかく、なんだこの慰謝料請求ってのは……っ」

その書状に記された金額に、家令が俺の後ろで息を呑む音が聞こえる。

「おや？ 依頼人が家を出る際に、侯爵の浮気の証拠書類を置いていかれたと聞いたのですが、もちろん目を通してますよね？」

「だからってこんな金額になるのか？ 別に愛人がいたわけじゃない。ただの性欲処理だ。しかも二ヶ月間だけだろ！」

「期間の問題ではないんですよ。不貞をしたか、していないかの問題です。それに話を聞くところ、どうやら浮気なさっていたのは四年も前からだとか。依頼人からそう聞いていますし、貴方と関係を持った方や職場の方から証言も得ていますよ？」

「は？」

「こういう時の女性の勘というのを舐めてはいけませんよ。その辺の占いより良く当たります」

嘘だろ……四年前からっていうことは、俺が初めて娼館に行った頃から既にアシユリーにバレていたってことか？ その頃から俺の裏切りを知っていたのに、アシユリーは何も言わず、ずっと耐えていたというのか——？

『いつてらっしゃい。ライナス』

いつも笑顔で俺を見送っていたアシユリーを思い出す。

夜遅くに他の女を抱いて帰ってきた夫を、どんな気持ちで見送っていたのだろう。何食わぬ顔で妻の額に口づけを落とす夫のことを、どんな目で見ていたのだろう。

「あ……あ……っ」

いたたまれなくなっと思わず片手で顔を覆う。

今更ながらどれだけアシユリーを傷つけてきたのかを突きつけられ、手が震えた。

きつと、俺が知らないところでたくさん泣かせてしまっていたに違いない。

アシユリーが何も言わないから、バレていないと信じて、疑いもしなかった。

それどころか、すべてがうまく回っているといい気になってすらいた。

実際はアシユリーに全部知られていたなんて——

「反論しないということは、お認めになられると考えてよろしいですか？」

「——ああ」

俺はもう力をなくして認めるしかなかった。

「では、依頼人の希望を呑んでいただけますか？ 奥様は一日も早い離婚をお望みです」

アシユリーが、一日も早い離婚を望んでる……？

——嫌だ。

「アシユリーに会わせてくれ。謝りたい。弁護士を寄越せるくらいなんだから無事なんだよな？ 彼女の意思を直接確認させてくれ」

「依頼人は侯爵にお会いになることを望んでおりません。だから私が代理で伺ったのです」

「離婚なんて大事な決断を本人不在の場で決められるわけないだろ！ 俺はアシユリーから直接言われていないんだ。本当に彼女が望んでるかなんてわからないだろ。だから絶対サインなんかしない！」

無駄な足掻きだとわかっていても、そんな簡単に別れを決めることなんてできない。

「……そうですか。わかりました。ではこうしましょう。関係者全員を集めて面会の日程を組みます」

「関係者って誰だ」

「お二人のご両親である前侯爵夫妻と伯爵夫妻です」

「はあ!? 親の前で不貞や離婚の話をしろってのか？ 冗談じゃない、断る！ これは俺とアシユリー二人の問題だ」

「違いますよ。貴族の結婚とは家同士の契約です。貴方たちの婚姻により、両家で取り決められた

契約があるのですよ。それを破棄するのですから関係者全員で話し合うのは当然です」

「俺は離婚に同意していない！ だからまず夫婦で話し合いをさせてくれ。アシユリーはどこにいるんだ？」

「ですから、依頼人は貴方と二人で会うことを望んでいません。関係者全員での面会を拒否されるのであれば、裁判も辞さないとのことですよ」

裁判という言葉に俺は硬直した。アシユリーは、俺と法廷で争うつもりなのか？

——そこまで、俺は憎まれてしまったのか。

今までのアシユリーからは考えられない行動に、ただただ驚いて、何も言葉が出てこない。

「依頼人の意向に沿って、関係者全員での面会を設定する——ということで話を進めてよろしいですか？」

そんなの……俺は、頷くしかないじゃないか——



「ご主人はやはりサインはしませんでした」

セイラが紹介してくれた弁護士さんが辺境まで来て、ライナスとのやり取りを報告してくれた。

「何から何までありがとうございます。なんとなくこうなるのではないかと予想していたので、大丈夫です」